

# 現代韓国の〈巡礼〉と民族主義

## 光州事件(1980年)以後

Pilgrimage, Sunrae and a Nationalism in Contemporary South Korea:  
Since Kwangju Minjung Uprising in 1980

真鍋祐子

はじめに

①ある〈巡礼〉の誕生

②光州巡礼の現象論

③メタファーとしての光州巡礼

④もうひとつの祖国を求める旅へ

おわりに

### 【論文要旨】

本稿の目的は、政治的事件を発端としたある〈巡礼〉の誕生と生成過程を追うなかで、民俗文化研究の一領域をなしてきた巡礼という現象がかならずしもア・プリオリな宗教的事象ではないことを示し、その政治性を指摘することにある。ここではそうした同時代性をあらわす好例として、韓国の光州事件(1980年)とそれにとまう巡礼現象を取り上げる。

すでに80年代初頭から学生や労働者などの運動家たちは光州を「民主聖地」に見立てた参拝を開始しており、それは機動隊との弔い合戦に明け暮れた80年代を通じて、次第に〈巡礼〉(sunrae)として制度化されていった。しかし、この文字どおり宗教現象そのものとしての巡礼の生成とともに、他方ではメタファーとしての巡礼が語られるようになっていく。

光州事件の戦跡をめぐるなかでは犠牲となった人びとの生き死にが頻繁に物語られるが、それは〈冤魂〉〈暴徒〉〈アカ〉など、いずれも儒教祭祀の対象から逸脱した死者たちである。光州巡礼における死の物語りは、こうしたネガティブな死を対抗的に逆転評価するなんらかのイデオロギーをもって、「五月光州」のポジティブな意味を創出してきた。すなわち光州事件にまつわる殺戮の記憶の物語りに見出されるのは、自明視された国民国家ナショナリズムを超え、それに対抗する代替物としての民族ナショナリズムを指向する政治的脈絡である。

光州をめぐるメタファーとしての巡礼は、それゆえ、具体的には「統一祖国」の実現過程として表象される。そこでは統一の共時的イメージとして中朝国境に位置する白頭山が描出されるとともに、統一の通時的イメージとして全羅道の「抵抗の伝統」が語られる。

キーワード：光州事件、光州巡礼、死の物語り、国民国家ナショナリズム／民族ナショナリズム、もうひとつの祖国